

日本カメラ博物館 JCI ライブラリー
学芸員 宮崎真二

小穴 純 (1907-1985) は、1930 年に東京帝国大学理学部物理学科を卒業後、教職に就き 1948 年に教授となりました。1968 年に退官した後は 1979 年まで上智大学理工学部物理学科で教授をつとめました。

写真測光、分光などの専攻分野に加え、写真はどこまで細かいものが写せるかということに関心が深く、生涯の研究テーマとなったマイクロ写真について『光学技術ハンドブック』(朝倉書店・1968 年) にて同分野を担当したほか、日本光学工業 (現: ニコン) のレンズで、一般的なマイクロ写真をはるかに超えた縮小率の文献複写を実施して解像力評価を行いました。この試みについては同社社史『50 年の歩み』(1967 年)、『光とマイクロと共に ニコン 75 年史』(1993 年) に記されています。その成果は IC、LSI 製造用レンズの性能向上にも反映され、日本の半導体工業発展を促しました。

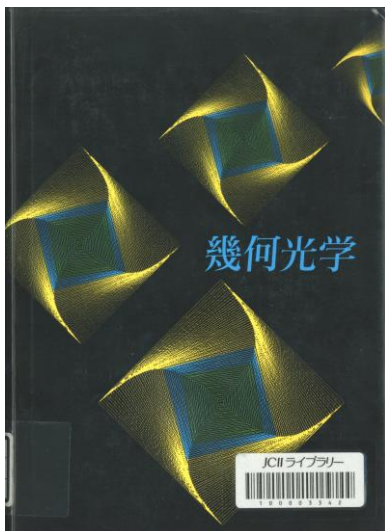
また JIS (日本工業規格) に「解像力の測定法」が制定されるにあたり、原案執筆ならびに自らの研究室でレンズ解像力測定用チャートを作成、頒布しました。1968 年には JCI の理事に就任し、チャートの標準化に尽力しました。これらの功績が評価され、1966 年に紫綬褒章、1979 年に勲三等旭日中綬章を受章しています。



『アサヒカメラ』1957 年 8 月号

小穴の雑誌連載といえば、『アサヒカメラ』で 1957 年 8 月号から現在まで続くカメラのテストレポートコーナー「ニューフェイス診断室」に、連載開始から 1973 年 7 月号の第 192 回まで携わったことが挙げられます。連載に関するエピソードなどについては「大学院学生として小穴先生の書生のような身分で研究室をうろうろしていた」(『カメラと戦争』) と語る小倉磐夫が、同誌の連載「Dr. オグラの写進化論」で記しています。一例として 1991 年 7 月号「引伸し作業でのピント合わせと“小穴式ルーペ”」や、同年 11 月号「座談の名手たちとの「診断室」の楽しさ」、1990 年 10 月号「EE 第一号オリンパス・オートアイと助手の哀歓」などがあります。また同号には「ニューフェイス診断室 400 回記念特集 歴代ドクターのプロフィール」も掲載されており、こちらも興味深い内容です。

没後には『幾何光学』(新技術コミュニケーションズ・1986 年) が刊行されました。本書は上智大学退職後に、ある光学メーカーで行った社内教育講義の原稿を基にしたものです。原稿印刷物化の希望と構想は同講義開始時からあったものの、「学生とメーカーの人達に話すのでは、内容を変える必要がある」「話し言葉と文章とは違うから書き直す」(あとがき) として、最期まで本原稿の再構成に取り組むなど、正確な仕事を旨とする完璧主義を貫いた姿が伺われます。



『幾何光学』